校内研通信Ｎｏ．６

平成２９年度研究テーマ 確かな学力を支える読解力の育成

大津町小中学校共通実践事項
(1)話し手に体を向けて聞く　(2)「めあて」と「まとめ」の明示
(3)家庭学習の習慣化　(4)県学力調査に向けた課題克服プリントの計画的活用

10 月 31 日（火）
米多

中研で授業をされた岡本先生「名前をみてちょうだい」と右田先生「海のいのち」について、成果と課題をまとめたいと思います。岡本先生、右田先生、貴重な授業をありがとうございました。

第2学年「名前をみてちょうだい」２－３岡本先生

＜成果＞

①めあての提示

→授業は「えっちゃんの怒っている気持ちが１番伝わる言葉はどれかな。」というめあてでした。３つの会話文の中から１番を決めるという選択型のめあてで、子ども達は全員選んで、選んだ理由を発表することができました。課題が焦点化され、スッキリした授業で子ども達も分かりやすかったのではないでしょうか。

②場のコーディネート

→同じものを選んだ人同士で考えを交流し、練り合う場を設定されていました。意見が同じ人同士なので、子ども達も安心して発言できているようでした。

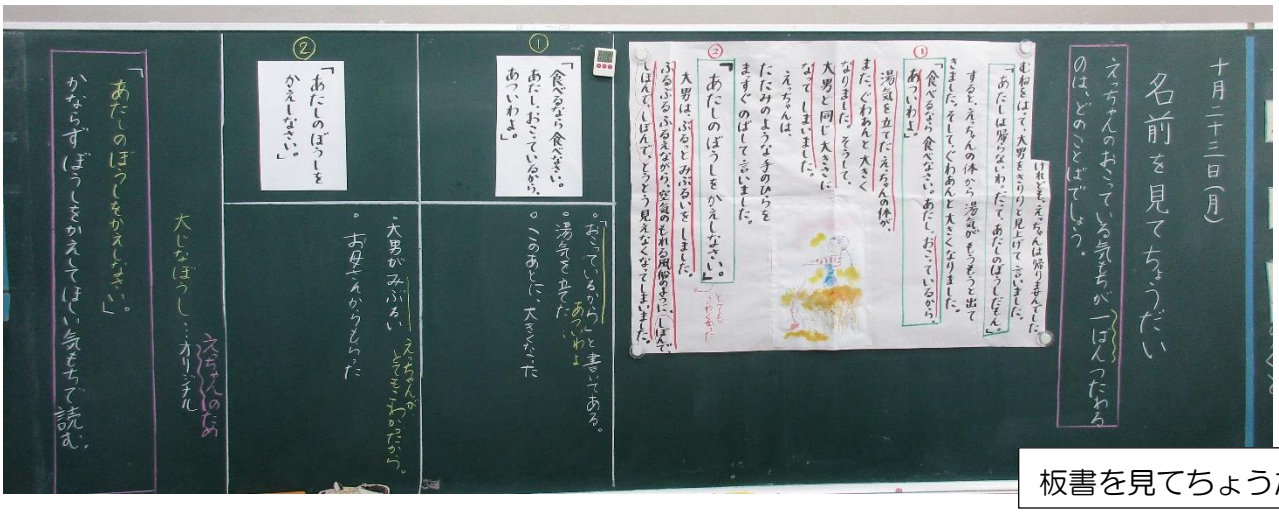
③単元のゴールを意識した導入

→単元のゴールである「音読発表会」のために、どう音読したらよいかという課題意識を授業の導入で子ども達にもたせていました。「３つの会話文とも全く同じように怒って言えばいいのかな。」と発問することで、子ども達に疑問をもたせ、問いにつなげることができました。

＜課題＞

着目させる叙述・発言へのこだわり

→事後研では、物語のどの言葉を特に取り上げるか、ということについて教材研究と授業展開の両面から検討が行われました。「名前を見てちょうだい」では、えっちゃんが大男に立ち向かっていく場面で３つの台詞が続きます。子どもたちがそれぞれに理由を述べる中、教師はどの発言や理由を取り上げて、討論するかということが問われました。教師の教材研究（物語の読み方）と、子どもの学習を重ねていくことが大切だと確認できました。



板書を見てちょうだい

第6学年 「海のいのち」 6－1右田先生

＜成果＞

①叙述へのこだわり

→右田先生の熱心な指導により、子ども達は叙述への意識が高く、全文プリントにマーカーで根拠となる叙述にラインを引けていました。国語科では意見―根拠（叙述）―理由付けで意見を言えることが大切です。それが、論理的に考える子ども（目指す子どもの姿）につながります。

②板書の構造化

→毎時間、対話メモにより考えをまとめ、練り上げていました。本授業では「瀬の主」を中心に右側にクライマックス前の「太一」、左側にクライマックス後の「太一」を書き、変容を捉えやすく工夫されていました。（下の板書を見てください。）国語に限らず、視覚化はＵＤの大事な要素です。

③教材研究

→何よりも、右田先生の教材研究の深さに感心させられました。このことが子ども達にも伝わり、よりよい授業作りにつながっているのだと思います。教材研究大切ですね。

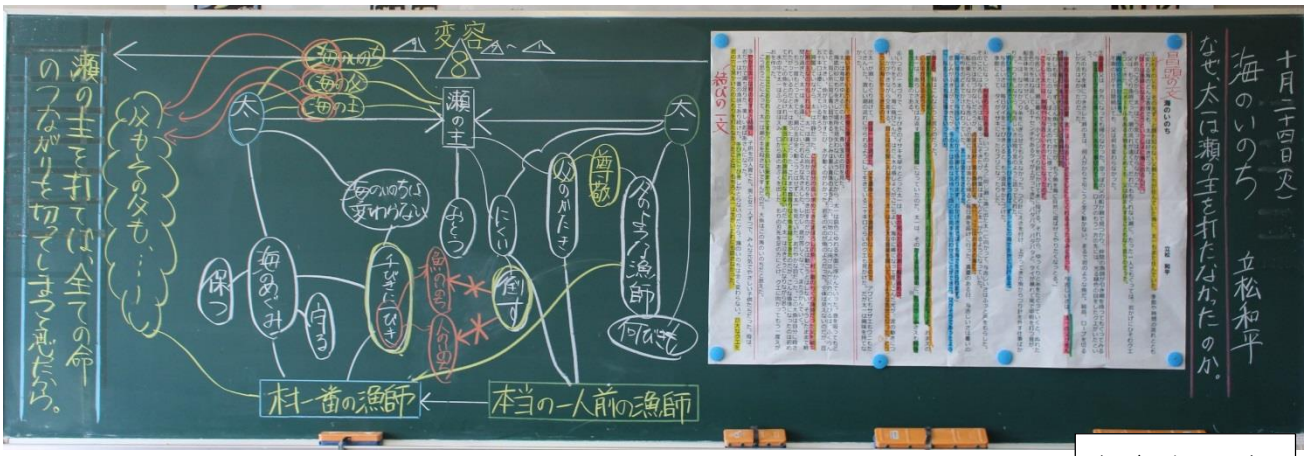
＜課題＞

①授業構成

→今回は「なぜ、太一は瀬の主をうたなかったのか」というめあてを提示後、「一人前の漁師」と「村一番の漁師」を対比させ、村一番の漁師とはどんな漁師かを思考する、という授業構成で中心課題に迫っていきました。ただ、その２つを混同したり、瀬の主の捉え方の変容にいきつけなかったりして、目標に届かなかったと右田先生が振り返っていました。シンプルにめあて発問で子ども達に問うてもよかったのかなと意見が出ました。

②叙述=意見

→叙述にこだわる一方で、意見を言う際、叙述から意見を述べることができない子が多かったようです。つまり、叙述が意見になって、言葉から考えを創造できていません。そこで、もう一工夫必要かなと思います。例えば、「〇〇〇（叙述）以外の言葉で言ってみて。」と発問したり、意見をいくつか準備し、その中から選び、選んだ理由と根拠（叙述）を述べたり、などの手立てを講じると、意見と叙述がはっきり区別できるかなと感じました。



板書はいのち